

魂の在り処と故郷

太田 宏人 著述家 曹洞宗僧侶*

Place Where His Soul Exists, and “Hometown”

OTA Hirohito

援助活動で出会う魂

自己紹介を始めると長くなるのでかき摘んで述べる。私は曹洞宗の僧侶でありつつ、新潟県の病院と併設の高齢者施設で瞑想の指導や傾聴、メンタルケア、看取りなどを行ない、東京の住まいの近くの病院では血液疾患の患者の話を聴いている。また月に一回、東日本大震災で被害に遭った女川町に出向き、被災者を訪ねている。被災地では、仮設住宅の人たちはもちろん困っているが、自宅に住んでいる人たちの方が、じつは傷ついていたりする。多くの家屋が全半壊する中で、家の残った人は逆に肩身が狭くなるからだ。町中を歩くにも気が引けるし、支援物資はまったく来ないという変な逆転現象が起こっている。

そうした中で、魂との関わりと思えることがある。「メンタルケア」と呼んではいるが、「メンタル」でなく魂のことをしていると感ずるのだ。ある若い娘さんに、記憶をすべて失う症状が出た。身近な人さえ忘れてしまい、親に向かって「お前、誰だ」と言うような状態だった。ところが立ち居振る舞いを見ていると、紛れも

なくその人だと分かる。その人をその人たらしめる魂は、言葉や心や意識とは違ったところにあると感じられた。それは育ち、暮らしを経るうちに、周りから作られてゆき、善くも悪くも、周りの世界を映し出すものなのではないか。

精神病院や高齢者施設のお年寄りに会うと、だいたい薬を飲んで、症状を抑えている。あるお婆さんは、絶対に風呂に入らないと言っていた。またこの方には法華の強い信仰があり、はじめは禅宗なんか要らんと言われた。ところが話を聞くうち、私の訪ねてゆくに日は必ず風呂に入る、それも進んで入るようになった。これは薬の効果ではなかろうと思う。宗派は違っても、仏様を背負っているので受け入れてもらったのだろう。そういうところに魂との出会いはありそうだ。

「故郷へ送る」

私は1994年から2000年まで南米のペルーに住み、日系三世の妻を得て、新聞記者をしていた。97年から2年ほど、首都のリマから南に150キロほどの、南米大陸で一番古いお寺である慈恩寺に通った。

この寺の背景を説明しておこう。ペルーでは、1899年に最初の集団移民790人が入ったけれど、慣れない土地のサトウキビ畑での重労働

* otadejp@yahoo.co.jp

働と伝染病、それに「故郷恋しい病」と外務省の文書に出る精神疾患も起こり、最初の年だけで146人も亡くなった。そこで衛生状態を改善するとともに、1903年の第二回の航海では曹洞宗のお坊さんが兵庫県の神崎郡から加わり、1907年（明治40年）にこの慈恩寺を建立し、亡くなった人たちの供養を始めたのだった。

しかし第六世の住職の死後は、寺は地元のペルー人の管理になっていた。2000基ほどの白木の位牌が残るけれど、木喰い虫にやられてずいぶん傷んでいた。あちらの木喰い虫は強力で、中を食べてゆくので、表面こそ残っているが中は空っぽになった位牌もある。そこで位牌管理の手伝いに出向いたのだった。週末の休みを使って寺で日本語を教え、空いた時間に位牌の修理と掃除をしていた。

今は、この寺の近所に日系人はほとんどおらず、日曜日などにリマから訪れる人が多い。「うちのおじいちゃんの位牌は」などと訊ねると、管理人が探してくれる。ところがその親切そうなペルー人のお婆さんは、日本語ができないので、行き当たりばったりで適当に出してくるのだ。日系の子孫も日本語がわからず、喜んで違う位牌を拝んでいる。管理人はお金をもらって収入としているが、これでは日系人がかわいそうと思った。そこで名簿を作り、番号を振って間違いの起こらないようにしようと作業を始めたのである。

位牌の他に、仏壇もたくさんあった。日系人のほとんどは現地のカトリックに入信しているが、宗教的な規範は緩く、例えば、今でも日系人には、教会の葬式で焼香を許している。このため仏壇を持ち続ける家も多かった。けれども、だんだん重荷になって寺に納めるようになり、多数、集まっていたのだ。

ある厨子の中に、小さな袋がたくさん置いてあった。見ると「遺髪」とか「爪」あるいは「墓土」などと書いたものが、四十人分くらい

あった。ペルーでは、一世の時代には髪の毛とか爪を、それらが無い場合には土葬した墓の土を日本に送り、故郷の墓に入れていた。ところが、独り者などで送り先のわからない分があり、「読経師」というペルー独特の半僧半俗の仏教者が預かっていた。しかし太平洋戦争が起こり、日本とペルーは国交断絶してしまった。時は過ぎ、読経師が亡くなると、ゆき場のない遺髪や爪、墓土、さらに無縁の位牌168名分が1973年、この寺に移されたのだった。

なぜ髪、爪、墓土を故郷に送り届けねばならなかったのか。ここに日本人の靈魂観の重要なところが出ていると思われる。

今年の8月には、太平洋戦争の激戦地・硫黄島に、遺族訪問事業の取材で行ってきた。同島では遺骨収集事業が続けられているが、その理由として「遺骨を日本に帰さなければいけないから」、と関係者は言う。だが硫黄島は日本なので、正確には「日本に」でなく「故郷に」なのだと思う。ペルーで「日本へ戻そう」と言っていたが、このときの「日本」もやはり「故郷」の意味なのだ。言い換えれば、魂にとって帰るところは国家としての日本でなく、国土なのだ。

日本人の魂の見方は、この国土としての日本から離れて行かないんだなあと思われる。遺骨や遺髪などを故郷に帰すのは、シンポジウム最初の津軽の「カミサマ」の報告にもあったが、安定感を求めるためではないだろうか。魂が安定しない要因をなるべく排除する、つまり宥めすかすとか慰撫して安定させるのが日本人にとっての供養で、このとき故郷の土地と故人の肉体、もしくは魂との繋がりは欠かせないのだろう。

「ペット供養」から見た魂との再会

私は僧侶だが、もしかすると、お釈迦様から見たらいい加減と言われるようなことを行なっ

ているかもしれない。なぜなら、例えば「ペット供養」をしているからだ。犬や猫などペットの供養は、教義にあるのだろうか。私は在家の出身で、父親の寺を継いだのではない。日本の仏教では珍しいことで、師匠から、寺ではやることがないからお前は外で勝手にやれと言われ、その通り好き勝手にしている。そのなかでいちばん坊さんらしいのがペット供養だと思う。

先ほどの渡辺先生の話では、ペットのワンちゃんにお酒を吹きかけたら治ってしまった。言葉をいっさい使わない、本当の魂のケアだと思う。ペット供養で大切なところも、そこだと考える。ペット供養に来る人は、菩提寺のない人が多い。初めて僧侶を見たとかで、人間として当たり前のことを不思議がられる。私が手洗いに立つと「トイレ行くんですか?」とまじめに聞いてくるのでびっくりし、この人たちの前ではおなら一つできないな、とってしまう。その私がお経を読んで供養すると、彼らはボロボロ泣く。「俺はこんなにすごいのか」と錯覚しそうになるくらいだが、もちろん古くから受け継いだお経を読んでいるだけで、それが力になっているのだ。

宗教的な経験の無い人たちが、ペット供養の場に立って、はじめて泣く。儀礼の力とは、本当に大切なものだ。ただ、ペット供養で泣く要因は、他にもいくつか数えられる。人間の葬儀では、遺族が人目にさらされる。遺族は最初に焼香するため、参列者の注目の的になる。焼香の方法が分からない人は、はじめの人を見て模倣したがるためだ。ふだん着慣れない喪服なんか着ているし、なかなか泣けない。でもペット供養になると、飼い主さんしかいない。だから、悲しみを素の状態で見せる場になる。

人間の場合でも、納棺の時には家族しかいないので、同じことが起こっている。布団のご遺体をお棺に入れると、生の世界から死の世界に移るのがはっきり見える。そこで遺族の人たち

はグッと来るのだ。ペット供養では、これと同じことが遺骸の無い場で起こっている。

葬儀社の商売の思わくもありそうだが、ペットにはお盆の供養もある。教義的な疑問を抱きつつもお経を読んでいると、「帰ってくるんですか」と訊ねられることがある。お盆には先祖の霊が帰るとされるが、ペットは先祖ではない。答えに困るので「対人援助」の方法として学んだ技術を出し、「あなたはどのように思われるのですか」と聴き返してみる。すると、あちらはいろいろ考えて滔々と答え、「帰ってきていると思います」などとなる。

しかし、ペットが先祖でないのは明らかだろう。人間の供養は、先祖からの縦軸に組み込む筋書きの再生産と言える。先祖が帰ってきて再会し、自分が死んだら向こうに行ってまた再会し、さらにこんどは自分が祀られる側になって、生きている人たちを護る。僧侶は、そうした筋書きが本当のことだと、体で示しながら儀式に臨むのだ。日本仏教の作り上げた流れだが、ペットはここに組み込めない。ペットは飼い主だけにつながる横軸の関係だ。

ペット供養は、葬式よりも法事の方が多い。葬式は頼まない人が多いからだ。あるペット葬儀会社の集計では、葬式を頼む人は2割しかない。でも、四十九日とか一周忌を頼む人が、その倍以上いる。宗教的なことに近づく術を知らない人は、はじめは「葬式をしよう」と発想しない。ところが時が経つにつれ、悲しみの重さに耐えられなくなり、どうしていいか分からない。そこで葬儀社に相談すると「では、お坊さんがいますから法事をしましょう」となる。四十九日をやると、だいたい次の一周忌もする。長い人になると8年とか20年とか、毎年のご供養に来られる。

私が「再会の物語」と名付けている出来事が、ペット供養ではよく起こる。「虹の橋のたもとで」という名の詩がある。「千の風になって」の

ペット版のようなもので、ネイティブアメリカンが書いたとの触れ込みで日本に入り、流行っているのだ。なぜか極楽浄土でなく天国に、虹の橋が架かっており、ペットたちはその橋のたもとで遊んでいるという。老いた体は若返り、きらきら輝いて幸せなのだが、なにか物足りない。そこへある日、橋の下の方から、懐かしい人影が歩いて来る。飼い主が死んで、やっとこちらに来たのだ。犬や猫などは喜んで走り寄りいっしょに橋を渡って天国に入る、という話だ。これに飼い主たちがとても感動している。

細かいところはさておき、再会が話の核となっている。けれども、この話を聞いて私は、この人たちはもうこっちの世界に戻ってくる気が無いのかな、と思ってしまう。天国に行きっぱなしなのだ。私たちが伝統としてきた供養では、魂は必ず帰ってきた。ペルーからでも故郷に戻った。ペット供養は横の繋がりでしかないなので、こうした行きっぱなしも起こり得るのだろう。魂を気づかう人たちが横の繋がりで考えるようになると、日本の伝統に疎くなり、帰ってくる魂のあり方が変わってゆくかもしれない。これをもういちど縦に変換する工夫が要るだろうと思う。

魂をケアする次元

魂のケアとはどんなものか考えるとき、ペット供養が役に立つ。言葉で救われるレベルは確かにあって、それは論理の世界になる。次に、芸術などの情緒の世界がある。「スピリチュアルケア」というのはその辺なのかなと感じる。しかしまだその先があって、それが魂のところだろう。もう言葉ではないし感覚でも情緒でもない、何とも言いようの無い世界がある。

仏教の教義からすると、愛別離苦と言って、ペットへの愛着は否定している。このあいだ、九州の浄土真宗の集いに呼ばれてお話をした

が、地元のまとめ役の僧侶はご挨拶の中で、この世の物事への執着はよくないと言われていた。それなのに私がペット供養のことを言ったら、飼っている犬が死んだときにご飯を食べられなくなった、と、彼は話された。はじめの話と食い違うわけだが、ペットとの関わりでは人間のあり方がむき出しになるのだ。そこにどう関わるかが、我われ宗教者の試されるところとなる。

予稿の私の紹介のところに、臨死体験を2回したと書いてある。一度目は中学生で、体育館の2階から落ちて後頭部を打ったときだった。二回目は去年、ステージ4だった悪性腫瘍の手術を受け、かなり危険な状態だった。手術中に心臓が止まったそう。その時、暗いトンネルを歩いていて、なぜか知らないが素っ裸で恥ずかしかった。

この手術の前に担当医から「もうあなたは生きるか死ぬか分からないから、家族にちゃんと伝えて」などと言われ、子供も二人いるのでこのまま死ねないなど、悶々としていた。しかし、あるとき突然、病室で、生きることも死ぬことも同じと思えた瞬間があった。スカーッとまったく不安が無くなり、言葉ではうまく言えないが、世界が本当にものすごくきれいに見えた。枕さえ光り輝いていた。魂の救済を感じた。有難いと思った。

その状態で手術室に運ばれてゆくと、仏様のような顔になっていたのだろうか、行く先々で「怖くないですか」と聞かれる。「あんたたちがそんなに言うから怖くなるんだよ」と思ったけれど、怖さは全然無かった。手術中にちょっと危なくなったらしいが、生き返ってしまった。このときの経験は、なかなか言葉にならない。

不安の有るときにどうケアするか、医学では言葉とか表現とか、さらには向精神薬の課題になろうが、体験からすると、魂の救済は別の次元のことと思う。